

特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する 学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議

令和4年2月16日
特定分野に特異な才能のある児童生徒
に対する学校における指導・支援
の在り方等に関する有識者会議
(第7回)
資料 1-2

1. 設置までの経緯

- 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する教育に関し、我が国の学校において才能をどのように定義し、見だし、その能力を伸ばしていくのかという議論はこれまで十分に行われていなかった状況。
- 令和3年1月の中教審答申（『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～）等において、こうした児童生徒の指導・支援の在り方の専門的な検討が求められた。
- このため令和3年6月本会議を初等中等教育局長の下に設置。(座長:岩永雅也(放送大学学長))

2. 検討状況

- これまで6回の会議を開催。
 - ・第1回～第3回 これまでの研究成果、海外の事例などを基に議論
 - ・第4回 アンケートの結果（808件回答）、学校外の学びの場の事例などを基に議論
 - ・第5回 論点整理たたき台の提示、議論
 - ・第6回 論点整理案の提示、議論→座長一任
- 12月17日に論点整理をとりまとめ。
- 今後の予定 年明け以降、論点に沿って議論を進め、令和4年中に一定の結論を出す予定。

アンケート結果の概要

【実施方法】

文部科学省ウェブページを通じて回答を受付（期間：8月26日（木）～9月17日（金））

（回答者数）

本人	保護者	教師	支援団体	その他	合計
54	663	30	18	43	808

（事例数） ※ 1回答者が複数の事例を回答できるため、回答者件数と事例数は一致しない。

小学校段階	中学校段階	高等学校段階	合計
703	163	114	980

具体的な事例の内容（実際の記述の例）

【特異な才能】

- ・現在小2、小学校数学は終了し中学校数学も終了する勢い。整数問題が特に好きで、場合によっては大学レベルでの数学にも理解を示す。
 - ・5歳の頃から自ら仮説を立てて研究を開始、6歳で全国規模の自然科学コンクールで入賞。7歳で大学の研究施設で研究。
 - ・リズムや和声を理論なしに理解し即興でバンドの中に入って演奏できる。小学生では初見で上級レベルの曲をバイオリンで弾き講師からあり得ないと言われる。
- ※言語、数理、科学、芸術、音楽、運動などの領域における優れた能力のほか、機械やパソコン、哲学的な問いや政治・安全保障、地球温暖化等の社会問題など特定の事柄への強い関心、創造性、集中力、記憶力等の特性が見られた。

【学校で経験した困難】

- ・教科書の内容はすべて理解していたが、自分のレベルに合わせた勉強をすることはまったく許されなかった。授業中は常に暇を持て余していた。
 - ・発言をすると授業の雰囲気壊してしまい、申し訳なく感じてしまうので、わからないふりをしなければならなかった。しかし、わからないふりをするのもまた苦痛で、結局授業の中に自分を見出すことはできなかった。
 - ・学校で習っていない解法をテストなどで回答すると×にされる事が嫌だった。
 - ・鉛筆を持って字を書く速度の遅さと、脳内での処理速度の速さが釣り合わず、プリントでの学習にストレスを感じていた。
 - ・同級生との話がかみ合わず、大人と話している方が良い。あまり周りに理解をしてもらえない。友達に変わっている子扱いされる。
 - ・学校の友達と話するとき、言葉を簡単にしなければ、話が通じ合わない。
 - ・先生の間違ひも気付かやすく、指摘しても先生にすぐにはわかってもらえず悔しい思いをしたり、先生の矛盾している指導に対して納得いかない。
 - ・早熟な知能に対して情緒の発達が遅く感情のコントロールが未熟なので、些細な事で怒られてしまったり泣けてしまったり、他の児童と言い合いになったりする。
- ※以上のほか、ルールへの適応や感覚過敏に関する事などが見られた。

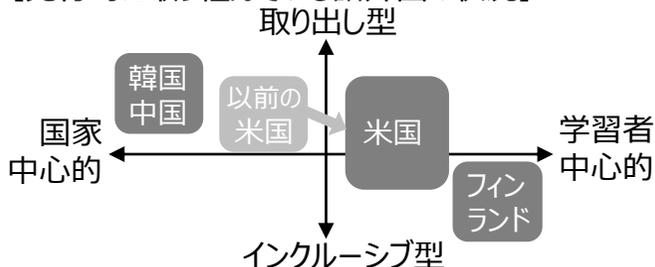
【効果的な才能への支援】

- ・正しい答えだけでなく、「何故、そのように考えるのか」、考え方を発表させてくれた先生のクラスは非常に楽しかったとのことだった。
 - ・自己肯定感が低いので、自信をつけさせる声かけをして頂いたことが有効だった。
 - ・暇になってしまう時間に、他の生徒を助けさせるなど役割を与えると、授業に前向きに参加できていた。
 - ・理解が得られ教師との信頼関係を築く事ができ教師のフォローで誤解される事も少なくなり自信を取り戻し前向きになれた。
- ※以上のほか、ICTの活用、特性に応じた口述や筆記の選択、支え合う友人関係、教師間の情報共有、スクールカウンセラー、養護教諭、図書館司書等による支援、学校外の学びの場（適応指導教室や博物館、大学の研究所、民間の学習の場、コンクールやジュニア数学オリンピックの催し等）見られた。

1 現状

- ・諸外国ではIQなどによる一律の基準ではなく、大綱的に定義。才能は、科学技術・芸術・スポーツ等の領域に固有なものとして捉える傾向。
- ・特異な才能のある児童生徒は、強い好奇心や感受性、豊かな想像力、過敏などの認知・発達の特徴があり、それに伴う困難を抱えることも。
- ・才能教育には、早修（プログラムを速く・早期に履修。飛び級、早期入学など）と拡充（深化内容の学習。放課後・夏季プログラム、コンテストなど）がある。

【先行的に取り組んでいる諸外国の状況】



【我が国における状況】

- ・特定の領域に焦点を当てた学校の支援や才能を伸長する支援。
 - * 科学技術人材を育成する「スーパーサイエンスハイスクール」
 - グローバル人材を育成する「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」
- * 大学等が理数系分野で突出した能力を有する児童生徒の能力を伸長する「グローバルサイエンスキャンパス」、「ジュニアドクター育成塾」
- ・高等学校では、大学等で学修を行った場合に単位認定可能。
- ・大学・民間事業者・NPO等が、興味・関心に応じたプログラムを実施。

2 指導・支援に関する課題

○学習に関する状況

- ・学校の授業での学習内容が知っていることばかり。
- ・活用の場面が与えられない。
- ⇒ 資質・能力を伸ばせない。充実した学びができない。

○学校生活に関する状況

- ・知的側面が年齢不相応に発達しているため、同級生との会話や友人関係構築に困難。
- ・教師との関係で課題を抱える場合もある。
- ・トラブルや孤立が発生する場合もある。

⇒ 以上の結果、不登校になる場合もある。

○特異な才能のある児童生徒を取り巻く状況

- ・教委・学校・教師による効果的な支援が行われている実態もあるが、各主体の理解や体制に左右。
- ・興味・関心に合った学校外の学びの場にアクセスできない（地域偏在）や、情報が届かない状況。
- ・環境整備は、国民的な合意形成の視点も重要。

3 検討の方向性

○全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の一環として検討

- ・学校現場が分断されたり、特異な才能のある児童生徒が差別対象となったりしないよう留意。

【検討の留意点】

- ・学校種の特徴を踏まえること
- ・学校外の学びの場など、広く児童生徒の特性や困難に応じた対応策を検討すること
- ・デジタル社会の進展を踏まえること
- ・教育課程の共通性との関係に留意すること

4 今後議論すべき論点

	教室内・学校内における対応	学校外における対応
学習活動の困難への対応	教材・指導法、個に応じた指導	学校外の学びの場の充実
学校生活の困難への対応	学級経営・生徒指導等	学校外の学びの場の充実

※その他、既存施策の活用や、才能と障害を併せ有する場合の対応についても検討。

○必要な環境や体制

- ・特異な才能や認知の特性等を見いだす方策
- ・教委や学校関係者の理解啓発のための方策
- ・学校や教委に対する必要な支援や体制整備
- ・学校外の学びの場を活用しやすくする方策
- ・保護者へのサポートや社会の理解啓発のための方策
- ・先行的な実践を全国に普及させるための方策

5 今後の予定

4で記載した各項目について、年明け以降に引き続き議論を行い、令和4年中に有識者会議としてのまとめを行う。

- 秋田 喜代美 学習院大学文学部教授
- 市川 伸一 東京大学名誉教授、帝京大学中学校・高等学校校長補佐
- 今村 久美 認定特定非営利活動法人カトリバ代表理事
- ◎ 岩永 雅也 放送大学学長
- 大島 まり 東京大学大学院情報学環・東京大学生産技術研究所教授
- 中島 さち子 株式会社steAm代表取締役
- 根津 朋実 早稲田大学教育・総合科学学術院教授
- 福本 理恵 株式会社SPACE代表取締役
- 藤田 晃之 筑波大学人間系教授
- 本田 秀夫 信州大学医学部子ども心の発達医学教室教授
- 松村 暢隆 関西大学名誉教授